

☆大橋晴美さんの講演

「日本と中国、二つの祖国を生きる」
第2部は、「日本と中国、二つの祖国を生きる」をテーマに大橋晴美さんにお話をいただいた。公立中学校教諭の大橋さんは、8歳の時に、家族6人で祖父の故郷、長野県豊丘村へ帰国した。小中学生時代、発音の理由に「中国人」と言われたことなどから、高校では生い立ちを隠した。大学に進む中で、次第に二つの祖国に生きる自分を見つけ、教師になり同じ境遇の帰国者に出会い、残留日本人2世として生きる決意をしたと話された。



大橋晴美さん

1970年、中国遼寧省沈陽市生まれ。
78年、長野県下伊那郡豊丘村へ永住帰国
90年、私立大学文学部英文学科 入学
94年、長野県公立中学校英語教諭に採用
2007年〜10年、中国へ留学
10年、教職復帰



日本で永住帰国を取るために、家では中国語を使っている。家では中国語を使っているというルールを作った。中国では日本人と呼ばれ、日本に来たら逆に中国人って言われる。自分は本当に何者なんだろうと毎日悩みました。本当の日本人になるために、中国の部分を捨てていかなければ日本人になれない。そう勝手に思ってたんです。そして中国の部分を持つ母が疎ましかった。

日中友好のために平和の尊さを語り継ぐ

私自身というふうに残りの人生を生きていこうかと思うことがあります。この日本と中国との間に生まれた運命をどう全うしようかと思うとき、3つのことを思います。

まず一つめは、日本と中国の現在です。日中友好です。教育現場に呼ばれたら行って話をしたい。長野県阿智村の満蒙平和記念館で毎年夏休みに子どもたちと平和学習をしています。

中国文化を広める

二つめは、日本に中国文化を伝えたい。特に子どもたちが気軽に参加できる中国の遊びや切り絵体験や餃子パーティーなど色々できる教室を開きたいです。

異文化への理解を深める

最後に、文化には優劣はないと私は思っています。自分は日本人になりたくて中国の文化を捨ててきた時期もあったが、そうではなくて、中国の部分と日本の部分、両方持っていていい。文化や言葉に優劣はない。教育を通して、色々な国の文化を子どもたちに伝えていきたいです。

餃子作り教室

2023年8月8日(火) 尼崎市立小田南学習プラザにおいて、地域のみなさんと一緒に水餃子づくりで交流する会が開催された。この日は台風6号の影響を心配しながらの準備だったが、無事開催することができた。参加予定だった数人はコロナ感染の為、当初4組の予定を3組にしたの開始になった。学習者とスタッフが始めの1時間前に集まり皮と餡の仕込みをし、参加者のスムーズな体験を支えた。



午後1時から30分間、宗景さんが「中国残留日本人とはどのような人たちか」と題してプロジェクトを使い説明し、参加した学習者を一人ずつ紹介した。その後、全員で餃子を作り、できあがった餃子をグルーピングでいっしょに食べながら交流をし、終始和やかに進んだ。アンケートを小田地域課の方が集計して下さるので楽しみにしている。

(濱崎敬子)



第8回中国残留日本人への理解を深める集いの紹介

☆「遼太郎のひまわり」
2022年11月26日(土) 尼崎市立中央北生涯学習プラザで第8回「中国残留日本人への理解を深める集い」を開催した。第一部は12年信越放送制作「遼太郎のひまわり」を上映。中国残留日本人の父と中国人の母に生まれた大橋晴美さんは、日本の中学校教員になり中国の大学院で学ぶ機会を得る。息子の遼太郎さんと3年間中国に滞在し、大橋さんの生まれ故郷の村や満州時代の戦跡を訪ねる。現地の小学校に通った遼太郎さんは、中国の歴史教育の中で傷つくこともあったが、親友を得て交流を深めていく。帰国の時、クラスの仲間が贈ってくれた箱には、ひまわりの種が入っていた。自宅の庭で友情の証としてひまわりを大事に育て



る姿が印象的なドキュメンタリー。

☆ 対談交流

第3部はコスモスの会日本語教室の学習者で2世の方々を中心に対談交流を行った。親が日本人であることを知ったのはいつか？日本に来た時にどんなことを思い、困ったことは何か、などの問いかけに日本語の学習や仕事、暮らしのことなどをそれぞれ語った。直接表現した言葉ではなかったが、それぞれ国の無責任さや、支援の不十分さを考えさせる内容であった。

戦争がなければ、私も生まれてこなかったこの命、だからこそ日本と中国の負の歴史をプラスに変えていく力があると思っています。これが自分の生きる意味かなと思います。



万里の長城(留学生たちと)

大学の前で